

冷泉家時雨亭文庫蔵第四類本『人丸集』について： 『万葉集』次点本としての『人麿集』

著者	竹下 豊
引用	百舌鳥国文. 17, p.51-66
URL	http://doi.org/10.24729/00005091

冷泉家時雨亭文庫藏第四類本『人丸集』について

——『万葉集』次点本としての『人麿集』——

竹下 豊

は解題をご参照願いたい。

まず、本論に入る前に、従来の『人麿集』の伝本研究を踏まえ、^(注1)新たに紹介された冷泉家時雨亭文庫藏の四点を勘案した伝本整理を示しておきたい。これは、『詞林采葉抄・人丸集』に収載した『柿本家集』の解題に記したものを若干修正している。

第一類本

(イ)系統

彰考館文庫本(第三類本に合綴)・冷泉家時雨亭文庫本
『人丸集』に合綴)

(ロ)系統

冷泉家時雨亭文庫本(柿本家集)・宮内庁書陵部本(五〇一・二六一、ただし錯簡のまま書写)

(ハ)系統(散佚前西本願寺本三十六人集本系統)

『万葉集』を代表する歌人で、後世、歌聖として仰がれた柿本人麻呂の名を冠する三十六人集の一としての『人麿集』(以下、一般的呼称として用いる)は、さまざまな書名で伝わっているが、冷泉家時雨亭文庫にも四点の『人麿集』が伝存している。その四点は、いずれも影印に付して『人麿集 清巻本』『柿本人麿集 義空本』が冷泉家時雨亭叢書72『素寂本私家集・西山本私家集』(朝日新聞社、平成十六年一月)に、『人丸集』『柿本家集』が冷泉家時雨亭叢書78『詞林采葉抄・人丸集』(同、平成十七年六月)に収められている。この四点の『人麿集』は、それぞれ書名も異なり、同一系統に属するものはない。いずれも稿者が解題を担当する機会に恵まれたが、それぞれの『人麿集』についての詳細

宮内庁書陵部本(五一・二)・志香須賀文庫蔵醍醐本・京都女子大学蔵飛鳥井雅章本など。

(二)系統(正保版歌仙家集本系統)

冷泉家時雨亭文庫本(清誉本)・宮内庁書陵部蔵御所本(五一〇・一一)・宮内庁書陵部本(五〇六・八)・陽明文庫蔵本(二二・二)など。

第二類本(群書類従本系統)

群書類従本・宮内庁書陵部本(五〇一・四七)・岡田希雄旧蔵豊前本・桃園文庫旧蔵中院通茂本など。

第三類本

冷泉家時雨亭文庫本(義空本)・宮内庁書陵部本(五〇一・二九五)・彰考館文庫本(第一類本(イ)系統を合綴する)

第四類本

冷泉家時雨亭文庫本(人丸集、第一類本(イ)系統を合綴する)・国立歴史民俗博物館蔵高松宮旧蔵甲本(H一六〇〇一・二九四)・同乙本(H一六〇〇一・三七八)

この分類について簡単に説明しておきたい。

第一類本(イ)系統は、(ハ)(ニ)系統の上巻部分のみを有する伝本である。彰考館文庫本は、第三類本の末尾に合綴され、冷泉家時雨亭文庫本は、第四類本『人丸集』に合綴されているもので、

上巻の末尾の一首を欠く。第一類本(ロ)系統の『柿本家集』は錯簡があり、冷泉家時雨亭叢書収載に際し、錯簡を正して影印に付したが、この本は新編国歌大観本でいえば、二一八〜三〇一番歌を欠いている。この本を江戸初期に錯簡のまま書写したが、宮内庁書陵部本(五〇一・二六一)である。

第四類本は、これまで大きく三系統に分類されてきた『人麿集』のどの系統にも属さない、全く別系統の本である。したがって、新たに第四類本を立て、そこに属せしめたのであるが、その江戸時代の写本が、これまた未紹介であった国立歴史民俗博物館蔵高松宮旧蔵甲本・同乙本である。

本稿で取り上げようとする冷泉家時雨亭文庫蔵『人丸集』は、縦二二・五センチ、横一四・四センチの綴葉装の一帖で、重要文化財に指定されている。鎌倉時代中期頃写で、当該本を納めた桐箱は、蓋の中央に「萬葉抜書」と墨書する。この桐箱は近世のものである。表紙は後補で外題がなく、内題およびそれに類するものもない。見返しは本文共紙(楮斐交漉きの打紙)で、これが原表紙である。この原表紙は現在の表紙に見返しのごとく貼り付けられているため、外からは見えないが、左上に「人丸集」と打付け書きがある。当該書の解題ではこれを書名として採用した。全丁数は五〇丁である。

この五〇丁は、三十五丁裏から三十六丁裏の白紙を挟んで、全く別の二つの『人麿集』から成る。当該書解題では、一丁表から三十五丁表までの『人麿集』を根幹部、三面の白紙を挟んだのちの三十七丁表から四十四丁裏までの『人麿集』を付加部として扱った。根幹部は二九六首、付加部は小字補入二首を含めて六四首を収めている。

二つの『人麿集』のうち、付加部とした『人麿集』は、先にも言及したように、第一類本の上巻に相当する。根幹部は、これまでの『人麿集』とは全く系統を異にする伝本で、右の伝本整理で第四類本に分類し、『人丸集』と称してきたのはこの部分である（以下も同じ）。

二

『人丸集』の二九六首の中には、『万葉集』巻七の歌を原歌とすると思われるものが、二つの歌群で二五首、同じく巻十一が四つの歌群に分かれて、一五五首収載されている。そして、部分的には、『私家集大成 中古Ⅰ』所収の「人麿Ⅱ」の底本で、第二類本に属する書陵部本（五〇一・四七）と歌順の一致する箇所がある。しかし、この部分的一致は、両者の直接的な関係を示すものではなく、当該家集のそれぞれの原歌と看做される『万

葉集』の歌の配列順に起因するものとみられ、その箇所においても本文異同が少なくないのである。

また、『人丸集』収載歌のうち、第二類本にはなく、第三類本の冷泉家時雨亭文庫蔵『柿本人麿集 義空本』にのみ見える歌が一三首ある。また、第一類本・第二類本・第三類本の代表的伝本にも見えない歌が、三九首を数える。この三九首の内訳は、巻十一の二六首をはじめとして『万葉集』の歌を原歌とすると思われるものが三二首、非万葉歌が七首である。

このように、第四類本『人丸集』は、第一類本は勿論、第二類本、第三類本とも直接的な関係は考えられず、収載歌も様相を異にしている。

『人丸集』のうち、〈万葉歌〉（以下、本稿において『万葉集』の歌を原歌とする歌を示す）がまとまって収載されている部分を示すと次のようになる。なお、以下の算用数字は『人丸集』の最初の歌からの通し番号であり、『万葉集』の歌番号は、旧国歌大観番号である。

- 1、1（巻七・二〇九二）～16（巻七・二二四二）
（万葉歌）巻七 一六首
- 11、43（巻七・二〇八九）～51（巻七・二〇六八）
（万葉歌）巻七 九首

※このIIの部分のみ、歌順が逆になっている。

III、114 (卷十一・二三六八) 〳 132 (卷十一・二四五三)

〔万葉歌〕 卷十一 一九首

IV、133 (卷十一・二六一五) 〳 193 (卷十一・二七八八)

〔万葉歌〕 卷十一 六一首

V、194 (卷十一・二四五四) 〳 250 (卷十一・二六一四)

〔万葉歌〕 卷十一 五七首

VI、251 (卷十一・二七八九) 〳 268 (卷十一・二八三八)

〔万葉歌〕 卷十一 一八首

I 〳 VIの歌群のほかにも、非〔万葉歌〕の間に、二首連続する場合も含めて約二〇首の〔万葉歌〕(中には〔万葉歌〕と認定してよいか判断に迷うものもある)があるので、冷泉家時雨亭文庫蔵『人丸集』は、総歌数二九六首のうち、『万葉集』の歌を原歌とすると思われる歌が、卷十一を中心として約二〇〇首を占めていることになる。また、右のIII 〳 VIの〔万葉歌〕歌群は、IVとVを入れ替えると、

III、114 (卷十一・二三六八) 〳 132 (卷十一・二四五三)

〔万葉歌〕 卷十一 一九首

V、194 (卷十一・二四五四) 〳 250 (卷十一・二六一四)

〔万葉歌〕 卷十一 五七首

IV、133 (卷十一・二六一五) 〳 193 (卷十一・二七八八)

〔万葉歌〕 卷十一 六一首

VI、251 (卷十一・二七八九) 〳 268 (卷十一・二八三八)

〔万葉歌〕 卷十一 一八首

となる。各歌群の最後の歌と最初の歌がつながることになり、卷十一・二三六八 〳 卷十一・二八三八までの〔万葉歌〕が、途中の歌を多く欠きながらも、『万葉集』の歌順に沿って並んでいることになる。ただし、歌順の乱れている箇所もないわけではない。

これだけ大量の〔万葉歌〕、特に卷十一の歌を原歌とすると看做される〔万葉歌〕が、ほぼ『万葉集』の歌順通りに収められているのであるから、当然、この『人丸集』は『万葉集』との深い関係が考えられる。

冷泉家時雨亭叢書の『人丸集』の解題において、この『人丸集』が『万葉集』の次点本(あるいは古点まで遡る)としてみても貴重であるという見通しを述べたが、紙幅の関係で、二例を挙げての簡単な記述にとどめざるを得なかった。本稿において改めてこの点について言及することにした。

二

まず、『人丸集』の本文が『万葉集』の次点本の訓と一致する

例を挙げてみたい。以下、本稿では、『万葉集』の本文は西本願寺本に拠るが、必要に応じて諸本との本文の異同については言及することとする。また、『万葉集』諸本の訓は清濁の区別を記さない（以下、傍線・圏点は私に付したものである）。

① 206 ゆふされば ゆかのうへさらず つげまくら されど
もきみを まつぞくるしき （歌頭に「十一」）

夕去 床重不去 黄楊枕 射然汝 主待固

（巻十一・二五〇三）

この歌は、『人麿集』の第三類本にも収められているが、その本文は、

ゆふされば ゆかのうへさらぬ つげまくら されどもな
れが ぬしまちがたし

であり、こちらの方が『万葉集』の本文に忠実なようである。しかし、一見、『万葉集』本文と乖離しているように見える『人丸集』の本文は、古（古葉略類聚鈔、以下、『万葉集』の伝本は、最初のみ伝本名を記し、あとは『校本萬葉集』の略号による）の訓と全く同じなのである。

万葉集・二五〇三番歌の下句はさまざまに訓まれており、次点本でも翫（嘉麿伝承本）「いりてもきみを まつぞくるしき」、類（類聚古集）「されとあるしを まつかくるしき」、廣（廣瀬本）

「イサトモキミヲ（カ）をミセケチにして右に傍書） マツソクルシキ」と訓んでいる。また、文（金沢文庫本）・西（西本願寺本）・矢（大矢本）・京（京大本）などは「イツシカナレカ ヌシマチカタシ」である。

概して、次点本が結句を「まつぞくるしき」と訓んでいるのは、結句中の「固」の字が、翫・類・古では、「困」の字となっているのと照応しているというべきであろう。京は「固」の下に緒で「困ツルシキイ本」の書き入れがあり、また「汝主待固」の左に緒で「キミヲマツソクルシキ」と記す。『類聚名義抄』（観智院本）には「困」の和訓に「クルシムツ」（法下・八五）があり、『色葉字類抄』（黒川本）に、「苦ツルシク」（困 苦 西反）（巻中・七四ウ）とあるから、「困」の字を「くるしき」と訓むことは可能である。さらに西などに「射然」の左に「サレトモ」と傍書があることとく、古のみに限らず、『人丸集』の本文のごとき訓の存在は、『万葉集』の諸伝本の中に明徴をとどめているのである。

② 261 わぎもこに こひてかひなみ しろたへの そでかへ
しては ゆめにみえつゝ （歌頭に「十一」）

吾妹兒尔 恋而為便無 白細布之 袖反之者 夢所見也 （巻十一・二八二）

万葉集・二八二番歌の訓で問題になるのは、第二句と結句である。第二句「恋而為便無」は、嘉の本文は「恋而為便无」、訓は「こひてかひなき」であり、本文と訓が合わないが、『人丸集』と一致する。廣は本文は嘉と同じながら、訓は「コヒテスヘナミ」で、西以下の仙覚本系統と同じい。結句は、嘉・廣ともに、本文「夢所見管」、訓「ゆめにみえつ」とであり、本文と訓が合致する。

『人丸集』は、次点本の嘉の訓と一致し、次点期の訓を伝えていることになる。なお、『人麿集』第二類本(宮内庁書陵部本(五〇一・四七)、以下第二類本の本文はこの本による)は、第二句を「こひてかひなき」として収めている。

次に『人丸集』が廣と一致する例を挙げてみよう。

③ 249 ゆふけにも うらにもつげあり こよひだに こざら

むきみを いつとかまたん (歌頭に「十一」)

夕トル毛 占尔毛告有 今夜谷 不来君乎 何時将待

(卷十一・二六二三)

万葉集・二六一三番歌の第二句を西は「ウラニモツケタル」、第四句を「キマサヌキミヲ」と訓む。一方、『人丸集』の本文は、廣の訓と全く一致するのである。この廣の訓は、第二句「占尔

毛告有」を「ウラニモツケアリ」、第四句「不来君乎」を「コサラムキミヲ」と訓んでおり、『万葉集』の本文に照らしても、そのように訓むことは可能である。第二句は、廣以外にも細(細井本)に「ウラニモツケアリ」とあり、嘉も第四句を「こざらむきみを」とするから、『人丸集』と一致する廣の訓は、特殊な訓みではないのである。因みに、『古今六帖』(第五・二八三七)は、「二句目「うらにもつげる」、四句目「きまさぬ君を」である。

先の②の例は、『万葉集』の本文とは合わない第二句の訓も含めて、嘉の訓が『人丸集』の本文と一致する例であったが、同様の例はほかにも見える。

④ 180 にはきよみ おきこぎいづる あまぶねの とるかぢ

まなく こひをするかも (歌頭に「十一」)

庭淨 奥方榜出 海舟乃 執梶間無 恋為鴨

(卷十一・二七四六)

『人丸集』の本文は嘉と全く一致する。西など他の『万葉集』の伝本は第二句を「オキヘコキイツル」、第四句「執梶間無」を「カチトルマナキ」(廣も同じ)と訓んでいるが、第四句は、『人丸集』のように「とるかぢまなく」と訓むことも出来る。この

歌は、他系統の『人麿集』には見えず、『古今六帖』は、

うはきよみ おきへさし出づる あま舟の かちとるまな

く 思ほゆるかも (第三・一八一四)

という本文で、第三句は「かちとるまなく」である。

⑤ 6 かくしつゝ ありなぐさめて たまのをの たへてみ

だれは すべなかるべし (歌頭に「十二」)

如是為乍 有名草目手 玉緒之 絶而別者 為便可無

(卷十一・二八二六)

卷十一・二八二六番歌の第四句は、嘉・廣や仙覚本系統も同じく「絶而別者」であり、嘉の訓「たえてみたれは」は本文と合致しない。廣は「タヘテワカレハ」の訓である。『万葉集』の古写本は、一字一字を明瞭に書くのが一般的であるから、「別」を「乱」と誤った可能性は低いように思われる。ともかく、『万葉集』の本文と合わない嘉の訓が、『人丸集』と一致するのである。なお、『古今六帖』にはこの歌はなく、『人麿集』も第三類本のみであり、冷泉家時雨亭文庫蔵『柿本人麿集 義空本』(以下、第三類本の本文はすべて当該本による)には、

カクテノミ マチツ、ヤヘム タマノヲノ タエテミダレ
テハ スベナカルベシ

冷泉家時雨亭文庫蔵第四類本『人丸集』について

とある。第二句が『人丸集』と大きく異なるが、第四句の「タエテミダレテハ」が、嘉のような訓の痕跡を残しているようである。

『万葉集』の本文と訓との間に齟齬があるにもかかわらず、その訓が『人丸集』と一致する例は、まだある。

⑥ 139 すりごろも きるとゆめみつ うつつには たがこと

のはか しげくあるべき (歌頭に「十一」)

摺衣 著有跡夢見津 寤者 執人之 言可將察

(万十一・二六二二)

卷十一・二六二二番歌の下句を「執人之言 可將察」と区切っても、『人丸集』の下句「たがことのはか しげくあるべき」のごとくには訓めないはずであるが、この下句も含めて、『人丸集』の本文は、嘉・廣の訓と全く一致し、類も三句目以下は同じ訓である。『人麿集』諸本では、第三類本が、
スリゴロモ キツ、ユメミツ ウツ、ニハ タガコトノ
ハカ シゲクアルベキ

とあり、二句目の傍書の本文を採ると、『人丸集』と一致する。なお、『古今六帖』は、

すりごろも きるとゆめみつ うつつには いづれの人の

ことかしげけん

(第五・三三〇)

であり、西以下の仙覚本系統の訓と一致し、『人丸集』とは下句が全く異なっている。

⑦22 たちておもひ めてぞおもふ くれなるの あかもたれひ

すそを ひきしすがたを (歌頭に「十二」)

立念 居毛曾念 紅之 赤裳下引 去之儀平

(卷十一・二五五〇)

『人丸集』の第二句は字足らずで、「めてもぞおもふ」の「も」を脱したものである。そうすると、嘉の訓と全く一致する。

訓の分かれるのは下句で、細が「アカモタレヒキ イニシスカ
タラ」とする以外は、西などの仙覚本系統は「アカモスソヒキ
イニシスカタラ」と訓んでいる。

嘉は下句を「赤裳下 引去之儀平」と区切り、「あかもたれひ
を ひきしすかたを」と訓んだものと推測されるが、結句の「去」

を無視した訓である。『人麿集』第二類本は、
たちておもひ めてもぞなげく くれなるの あかもたれひ
すそを ひきしすがたを

を 引しすがたを

の本文であり、下句は『人丸集』と一致する。ただし、二句目は『万葉集』の本文と離れており、第四類本の『人丸集』の方

が、『万葉集』の次点期の訓を正確に伝えているというべきであろう。なお、『古今六帖』は、

たちておもひ めてもぞ思ふ くれなるの あかもたれひ
き いにしすがたを (第五・三三三三)

と、細の訓と同じ本文で、廣および『和歌童蒙抄』と一致する。

⑧221 いもこふる わがなくなみだ きたたへの まくらか

よへる そでぞひちけん (歌頭「十二」)

妹恋 吾哭泣 敷妙 木枕通而 袖副所沾

(卷十一・二五四九)

『人丸集』は下句が問題である。『古今六帖』(第五・三三三六・
人丸)は「枕とほりて 袖さへぬれぬ」、他の『人麿集』では第
二類本のみに見え、「まくらとほりて そでぞひちぬる」である。

『万葉集』の諸本では、嘉が「まくらかよへる そでそひちぬ
る」、廣が「マクラカヨヘル ソテソヒチケル」とし、結句に小

異があるが、ともに「木枕通而」を「まくらかよへる」と本文
と合わない訓となつていながら、『人丸集』と一致しているの
である。しかも、嘉と廣の初句の訓は「いもこふる」であり、こ

の両伝本は、結句の小異を除き、他はすべて『人丸集』と一致
する。また、『人丸集』の結句は、現存諸本に見えない訓を伝え

る。

ているのではないかと思われるが、この点については、第四節でも言及することにした。

⑨ 224 ゆめにみても 猶かくばかり こふるわれ うつゝに

見ては ましていかがあらん (歌頭に「十一」)

夢耳 見尚幾許 恋吾者 寤見者 益而如何有

(卷十一・二五五三)

当該歌は『古今六帖』にも他系統の『人麿集』にも収載されていない。『人丸集』に近い訓を有するのは、やはり^嘉と^廣で、その訓を掲げてみる。

^嘉 ゆめにみて なをかくばかり こふるわれは うつゝ

にみては ましていかがあらむ

^廣 ユメニアテ ナヲカクハカリ コフルワレ ウツゝニ

ミテハ マシテイカナラム

文・西・紀(紀州本、『校本萬葉集』の神(神田本)を改む)・温(温故堂本)は上句を「ユメニノミ ミテスラコ、タ コフルワレ」と訓み、結句を「マシテイカナラム」と訓む。^嘉は、初句・二句を「夢耳見 尚幾許」と区切つての訓と思しい。また、結句「益而如何有」を「ましていかがあらむ」と訓んでも不適切ではないだろう。

『人丸集』は初句に小異があるが、第二句以下は^嘉と^廣の訓を組み合わせたような本文になつており、これはこれで、次点本の訓を伝えていると看做すことができる。

⑩ 120 よしゑやし きまさずきみを いかせむ いとはぬ

われは こひつゝをらん (歌頭に「十一」)

吉恵哉 不来座公 何為 不侍吾 恋乍居

(卷十一・二三七八)

卷十一・二三七八番歌は三句目「何為」四句目「不侍吾」の訓が分かれている。^嘉は両句とも『人丸集』と同じであり、^廣の訓は「ナニストカ ウトマスワレハ コヒツゝヲラム」で、傍書の訓によれば、^嘉と一致することになる。また、『袖中抄』は、

よしゑやし きまさぬ君を いかがせん いとはぬわれは

こひつゝをらん (第二「よしゑやし」の項)

とあり、二句目の打ち消しの助動詞「ず」の連体形が終止形かの小異のみで、他はすべて『人丸集』と一致する。

⑩の例は、「^廣」を「いとふ」と訓むか、「うとむ」と訓むかの相違があつたが、このような例を他に二例ほど挙げてみよう。

⑩ 188 わがせこに わがこひしくは 夏草の かりはらへど

も おひしくがごと (歌頭に「十一」)

吾背子尔 吾恋良久者 夏草之 刈除十方 生及如

(卷十一・二七六九)

『人丸集』の第四句「かりはらへども」は、類・廣の訓に一致し、『和歌童蒙抄』も同じである。類は「かりはらふとも」、

西以下の仙覚本系統は「カリソクレトモ」であり、『古今六帖』

(第六・三五五二)も「かりそくれども」である。

『人丸集』の二句目「わがこひしくは」は、本文「吾恋良久者」

の訓としてはおかしいが、部分的にせよ、第四句に次点本の訓をとどめているのである。なお、『人丸集』のこの歌は、他系統の『人麿集』には見えない。

⑪ 189 まのゝ池の こすげをかさに めはずして 人のよそ

なを たつべきものか (歌頭に「十一」)

真野池之 小菅乎笠尔 不縫為而 人之遠名乎 可立

(卷十一・二七七二)

この歌の場合は、四句目の「遠名」の訓が問題である。類・

類・古・廣の次点本および『綺語抄』は、「よそな」と訓み、結

句に小異のある類を除き、すべて『人丸集』と一致する。一方、

西などの仙覚本系統の訓および『古今六帖』(第五・三〇六九)、
『人麿集』第二類本は「とほ(を)な」である。

これまで言及してきた①②の例は、すべて『万葉集』卷十
一の例であったが、本稿第二節でⅠ、Ⅱに挙げた卷七の歌につ
いても、次点期の訓を伝えている例を見出すことができる。

⑬ 45 あしひきの 山がはのせの なるなへに つきゆみた
かく 雲たちわたる (歌頭に「七」)

足引之 山河之瀬之 響苗尔 弓月高 雲立渡

(卷七・一〇八八)

45 番歌は元・類の訓と全く一致するが、問題は第四句である。

元は本文を多くの伝本と同じく「弓月高」としながら、訓は『人
丸集』と同じく「つきゆみたかく」とし、類は本文は「弓月高」、

別提訓は「月ゆみたかく」とある。元は本文と訓が一致しない
が、これは、これまで触れてきた例でもわかるように、次点本
にはよく見られる傾向である。この〈万葉歌〉は『古今六帖』
には見えないが、他系統の『人麿集』の伝本では、第三類本が、

詠雲

アシヒキノ ヤマガハノセノ ナルナヘニ ユツキガタケ
ニ クモタチワタル (歌頭に「七」)

の「ユツキガタケニ」の左に「ツキユミタカク」と傍書しており、そのような訓のあったことをうかがわせる。ともかく、『人丸集』は元・類と一致し、次点本の訓を伝えていると考えてよい。

⑭60 しまづたふ あしはやをぶね 風まつと としはやへ

なむ あふとはなしに (歌頭に「七」)

嶋伝 足速乃小舟 風守 年者也経南 相常齒無二

(巻七・一四〇〇)

万葉集・一四〇〇番歌の第二、三句は「アシハヤノヲフネ カセマモリ」が西などの訓である。次点本でも元・類が第二句を「あしはやのをふね」と訓んでいる。ところが、古は第二句の本文が「足速小舟」で「乃」を欠き、本文と訓「アシハヤヲフネ」が照応している。紀は西と同じ本文、廣は「足速乃少舟」でありながら、ともに「あしはやをふね」と訓み、本文と訓が合っていない。また、第三句「風守」を元・類・古・紀・廣のごとく「かせまつ」と訓むのは無理であるが、西・矢・京の「カセマモリ」の「マモリ」が青であり、これは仙覚の改訓を示しているから、次点期には「かせまつ」という訓が行われていたようである。

結局、次点本の中で、『人丸集』と訓が全て一致するのは、古・

紀・廣である。『人麿集』の第一類本と第三類本にはこの歌は見えず、『古今六帖』にも収載されていないが、『和歌童蒙抄』に、
しまづたふ あしはやをぶね かせまつと としはやめな
む あふとはなしに
とあって、二・三句の本文が『人丸集』と一致する。このように、本文に合わない次点本の訓が、『人丸集』と一致しているのである。

以上、いささか煩雑になったが、『人丸集』が次点期の訓を、そのまま残していると看做される例を挙げてきた。これらの例は、『万葉集』の次点本や歌学書などでその訓の存在が確認できるものであった。そのほかに、『人丸集』の中には、現在の数少ない次点本や歌学書などで確認できないものの、次点期の訓(さ)らには古点)を残している可能性のある歌があるのではないかと考えられる。それを次節で述べることにしたい。

四

本節では、右にも述べたように、現在は、『万葉集』の諸伝本や次点期の歌学書などでは確認できないが、『人丸集』が、次点期の訓をとどめていると思われる例を、六例ほど挙げることに

したい。

⑩ 240 しるしなき こひもするかな ゆふされば 人のたま

くら ねぬるこゆへに (歌頭に「十一」)

駿無 恋毛為鹿 暮去者 人之手枕而 将膝児故

(卷十一・二五九九)

万葉集・二五九九番歌の第二句「恋毛為鹿」を嘉は「こひもするかな」と訓み、『人丸集』の第二句と一致する。また、第四句「人之手枕而」を西・矢・京は「ヒトノテマキテ」と訓み、「テマキテネナム」が背であるから、これは仙覚の改訓である。嘉・古・廣は「ひとのたまくら」で、本文と訓が離れているが、『人丸集』と一致する。結句は古・廣「マカムコユヘニ」で本文と訓が合わない。まだ『人丸集』の「ねぬるこゆへに」の方が、『万葉集』の本文に近いが、この訓は現存の『万葉集』諸本には見えない。

『人丸集』は「将」の字が活かされていない訓である。しかし、これまでも例を挙げたように、往々にして、次点本の訓が本文に忠実とはいえないケースが多いことを勘案すると、『人丸集』も次点期のひとつの訓と考えてよいのではないかと思われるのである。

⑩ 231 いひといへば みゝにたやすし ちひさくも 心のう

ちに わがおもはなくに

言云者 三三二田八醉四 小九毛 心中二 我念羽奈

九二 (卷十一・二五八二)

万葉集・二五八一番歌の第三句「小九毛」を西などは「スクナクモ」と訓んでいるが、嘉と廣は、「ちぬさくも」の訓で、『人丸集』と同じである。初句の「言云者」は嘉・廣ともに「ことにいへは」とあり、『人丸集』と相違するが、これを『人丸集』のごとく「いひといへば」と訓むことも可能であり、『人丸集』は、現存諸本にない独自の訓を伝えている可能性が考えられるのである。

⑩ 126 なか／＼に みずぞあらし みてしより こひの

ころの ましておもふ哉

中中 不見有徒 相見 恋心 益念

(卷十一・二三九二)

『人丸集』の歌は、『人麿集』の他の三系統および『古今六帖』には見えない。万葉集・二三九二番歌の嘉の訓は、

なか／＼に みさりしよりも あひみては こひしころ

ましておもほゆ

であり、第四句は字足らずで、「こひしきこころ」の誤りかと思われる。また、廣の第二句「アサリシヨリハ」は「ミサリシヨリハ」の誤写であろう。嘉・廣の誤りを訂すれば、西などの仙覚本系統と訓が一致する。

次点本を伝える一書として『人丸集』を見た場合、非仙覚本系、仙覚本系にも見えない独自の訓を伝えているのではないかと思われる。『万葉集』の本文の各句を、

中中 不見有 従相見 恋心 益念

と区切れば、『人丸集』の本文のような訓があつたのではないかと考えられる。第三句に問題がないわけではないが、次点本の訓が必ずしも本文に忠実ではないということを考慮し、また、結句の「ましておもふ哉」のように、詠嘆の終助詞「かな」で一首を閉じるのも王朝和歌化された訓として、よく見られる例である（「かも」と訓むべき所を「かな」と訓む例も少なくない）ことを勘案すれば、『人丸集』の本文のような訓も十分に想定できるように思うのである。

⑩ 197 あさじもの きえみきえずみ おもひつゝ いかでか

こよひ あかしつるかも (歌頭に「九」)

朝霜 消消 念乍 何此夜 明鴨 (卷十一・二四五八)

冷泉家時雨亭文庫蔵第四類本『人丸集』について

万葉集・二四五八番歌の下旬「何此夜 明鴨」を嘉・廣・細は、「いかでかこよひ あかしつるかも」と訓んでおり、『人丸集』の下旬と同じである。問題は第二句「消消」の訓である。嘉は「けなはけぬへく」、廣は「ケナハケナマク」であり、西以下の仙覚本系統も廣と同訓である。

ここで、注意したいのは、『人丸集』の「きえみきえずみ」が、『万葉集』には用例がなく、平安朝の和歌に用いられる表現であるということである。

白露の消えみ消えずみかひなくてふりぬる身をも思ふ比かな
な (源順集・一〇〇)

よそにかく消えみ消えずみあは雪のふるのやしろの神をし
ぞおもふ (実方集・九五)

この二首は「白露」「あは雪」を「消えみ消えずみ」と詠み、『人丸集』の「朝霜」を「消えみ消えずみ」と詠むのと似通っている。しかも、一首は『万葉集』の古点事業に大きな役割を果たしたとされる源順の歌である。古点事業の施訓が、王朝和歌化された『万葉集』の訓みでもあつたことを思えば、二四五八番歌の第二句「消消」を、『人丸集』の「こよひ」きえみきえずみ」と訓むのは、可能性としては十分に考えられると思うのである。

また、この『人丸集』の歌は『古今六帖』にはないが、他の三系統の『人麿集』に見えるので、その本文を掲げてみよう。
第一類本は、『新編国歌大観』の底本となった宮内庁書陵部本（五〇六・八）を用いる。

第一類本 あさ霜の きえみきえずみ おもへども いかで

かこよひ あかしつるかも

第二類本 朝霜の きえみきえずみ おもへども いかでか

こよひ あかしつるかも

第三類本 アサジモノ キエミキエズミ 思ツ、イツシカ

コヨヒ ハヤモアケムカモ

第一類本と第二類本の本文は同じであるが、第三句が『万葉集』の本文「念作」と乖離している。また、第三類本は下句が大幅に異なっている。ここでも、当該の第四類本『人丸集』が、『万葉集』の訓を正確に伝えていることが看とれるであろう。

①9 風ふかぬ うらになみたち なきなをば わがはをふ

るか あふことなしに

風不吹 浦尔浪立 無名平 吾者負香 逢者無二

(卷十一・二七二六)

万葉集・二七二六番歌の三句目以下を類・類は「なきなをふ

われはおふかも あふとはなしに」と訓み、西以下の仙覚本系統の諸本と同じである。廣は「ナキナヲモ ワレハオモフカモ アフトハナシニ」と訓み、第四句が本文と合わない独自の訓となっている。『人丸集』は、三句目以下が、『万葉集』の現存諸本に見えない独自の訓を伝えているのではないかと思われる。特に、「吾者負香」を「わがはをふるか」としているのは、本文に極めて忠実な訓を伝えているようである。

②196 むばたまの くらかみ山の 山くさの こさめふりし

み ますくおもほゆ (歌頭に「十一」)

烏玉 黒髮山 山草 小雨零敷 益益所念

(卷十一・二四五六)

万葉集・二四五六番歌の結句の訓は、類・廣が「ますくおもほゆ」で、『人丸集』に一致。第三句「山草」は、類の「やまくさ」がもつとも『人丸集』に近く、類・廣は「やますけの」、西以下は「ヤマスケニ」と訓む。また、第三句の「小雨零敷」を『人丸集』のごとく「こさめふりし」と訓むのは、「敷」がまったく考慮されていないことになる。しかし、次点(古点)にも、本文にこだわらない、あるいは本文を無視した訓もある。ので、これも当時の訓の反映かもしれないと思われるのである。

以上、臆測を交えて、『人丸集』が独自の訓を伝えている可能性のある例を六つほど挙げた。ほかに、一句単位で、現在の『万葉集』の諸伝本や歌学書では確認できない独自の訓を伝えているのではないかと推測される例もあるが、ここではこの六例のみにとどめておきたい。また、⑩で例を挙げ、折に触れて言及したように、私に四系統に分類した『人麿集』の伝本の中で、第四類本として新たに立てた当該の『人丸集』が、もつともよく『万葉集』の訓を伝えていると考えてよろしかろう。

五

平安後期の歌学者、顕昭は、「年来人丸集数十本伺ひ見侍りしに……」（『柿本朝臣人麻呂勅文』）と述べているから、平安末期には多数の『人丸集』が存在したらしい。冷泉家時雨亭文庫蔵『人丸集』の親本も、そうした伝本のひとつであったにちがいない。

冷泉家時雨亭文庫蔵本は、本文の終わった次丁の表（四十五丁表）の右下に「黒付四十三枚」と記された紙片（縦五・六センチ、横一・三センチ）、左上に「定家御筆 但奥／もみちはのちりぬる一哥ヨリ／末二枚 為家御筆曰」と書かれた切紙（縦七・九センチ、横二・七センチ）が貼られている。本稿で扱った『人丸集』

は、一丁表から三十五丁表までであるから、「定家御筆」と伝える部分に含まれている。その中には、一見、定家の筆跡によく似ている部分もあるが、仔細に見ると、全体的に筆勢や柔軟性を欠いており、定家の筆跡を模したものと判断される。しかし、これによって、今には伝わらないが、嘗て定家真筆部分を含む『人麿集』が存在したことは認められてよいだろう。

当該の『人丸集』は鎌倉時代中期頃写で、しかも一部を定家の書写した『人麿集』の写しと考えられるから、『万葉集』の次点期に当たる。しかも、本文には仙覚の新品以後の手は加えられていないと思われ、『万葉集』との関係を考察する上で、貴重な一書として評価できるのであろう。

『万葉集』巻十一の歌を原歌とする（万葉歌）は、『人麿集』の第三類本には一六九首入っており、これは、本稿第二節で示した『人丸集』ⅢⅤに収められた巻十一の（万葉歌）、一五五首を凌ぐ。しかし、これまで再三述べてきたように、当該の第四類本の『人丸集』がもつともよく『万葉集』の訓を伝えているといつてよいから、第一類本と第四類本に分けられる『人麿集』を、『万葉集』の訓点資料として参看する場合には、まず、この第四類本の『人丸集』に就くべきである。

最近、西尾市岩瀬文庫蔵の寛永版本の書き入れを精査し、現

在知られていない次点系の古写本の存在を發掘した真野道子氏の論を拝読する機会があった。しかし、廣瀬本の公開以後、まとまった『万葉集』の伝本の紹介は聞かない。冷泉家時雨亭文庫蔵『人丸集』は、『万葉集』の伝本ではないが、次点期の訓を伝える資料として、今後活用の余地があると思われる。

これまで、『人麿集』の諸伝本を次点期の訓を示す資料として用いるのに、多くの研究者が二の足を踏んできたのは、『人麿集』の諸伝本には本文の乱れが多々あり、同一系統の伝本の間にも本文の異なる例が多いという問題があったからであろう。当該『人丸集』にも誤写ではないかと思われる例も存するが、次点期の書写本として、また、『万葉集』巻十一の歌を一括して収める歌(家)集として貴重な存在である。

本稿に挙げた例にも見られるごとく、『万葉集』巻十一は、助詞・助動詞の大部分を文字として表さない、いわゆる略体歌も多く、多様な訓があったと推測される。その一端を、この冷泉家時雨亭文庫蔵『人丸集』から探ることができるだろうと思うのである。

(注1) 最近の伝本整理としては、冷泉家時雨亭文庫蔵の四点の『人麿集』が紹介される前に刊行された「一、柿本集解題」(平田

喜信・新藤協三・藤田洋治・加藤幸一『合本 三十六人集』(三弥井書店、平成十五年九月)、藤田氏担当)および『人丸集』『柿本家集』の紹介前に刊行された島田良二『人麿集全釈』(私家集全釈叢書34、風間書房、平成十六年九月)の解説がある。

(注2) 冷泉家時雨亭文庫蔵『人丸集』の歌の頭に、当該歌が『万葉集』のどの巻に入っているかを示す「七」「十一」などの漢数字(漢数字が併記されている場合は、右の漢数字)や「九」、「九」(「九」の見せ消ちと見られるものが多い)の符号などが記されている箇所がある。この注記には墨色の濃淡があり、これは、当該の注記が複数回に亘ることを示すものといつてよいかもしれない。

(注3) 後藤利雄「書影異本柿本集の研究」(『人麿の歌集とその成立』(至文堂、昭和三十六年十月)所収)

(注4) 阿野本万葉集再考―岩瀬文庫所蔵版本の書入を通して―

(『国語と国文学』第八十二巻第三号、平成十七年三月)
(注5) 冷泉家時雨亭文庫蔵の金沢文庫本『万葉集』巻第十八が紹介されたが(冷泉家時雨亭叢書39『金沢文庫本万葉集』巻第十八・中世万葉学)(朝日新聞社、平成六年十月)所収。解題は稿者担当)、これは仙覚本系統の伝本である。

(たけした ゆたか・本学教授)